

平成27年度 乳児保育研修会 報告書

- 【期 日】 平成27年9月26日（土）
【会 場】 マリトピア
【主 催】 佐賀県保育会
【参加者数】 145名
【内 容】 研修①『基調報告』 10:00～10:30
講師：田中 豊博氏（佐賀県保育会会長）

- 研修②『乳児保育の意義と保育者の役割』 10:30～16:00
講師：井桁 容子氏
（東京家政大学ナースリールーム主任・東京家政大学非常勤講師）

研修①『基調報告』

子ども子育て新制度について

1. 新幼保連携型認定子ども園と保育所との違い及び県内の現状
2. 幼稚園教諭・保育士資格
3. 処遇改善
4. その他
 - ・新制度になっても保育内容は変わらない。
 - ・子育て支援を地域に出て行き支援し、子育ての拠点としての要因を果たす。
 - ・職員処遇の検討（職員配置・就業時間・共済退職金・給料等）

（効果及び評価）

◎保育士の処遇に関してこれまで以上に検討されていて、子どもの最善の利益を求め頑張っている保育士が少しでも働きやすい環境（保育士不足等にも）に向けて動いてくださっている現状が垣間見られ、分かりやすく説明されていた。明日からの保育に少し明るさが見えてきたようである。



研修②『乳幼児保育の意義と保育者の役割』

乳幼児について

赤ちゃんは、有能・能動的・個性的である。

- ・「行き過ぎたさきまわり・先読み」の危険性

保育士が子どもの発達段階を理解した上での主体的活動は優先する。

- ・赤ちゃんが要求した時に求めに応じる。(いつも、抱っこ・おんぶが必要ではない)
- ・感情は生後3年の間に育つ。内発的動機付けによる遊びが、学びを促し意欲が育つ。子どもの個性に柔軟に対応する。

保育者の役割

- ・「子守り」と言わせないために、プロとしての意識を持ち、子どもの遊ぶ様子を丁寧に「善く観る」このことが大切である。

- ・自発的なあそびは、子ども理解につながり、保育士の質の高い保育につながる。そのことが、子どもへの最善の利益にもつながる。

- ・保護者に対しては、専門的知識の中で、質問の内容に正しく答え、思い込みを持たず子どもの持っている良いところを知らせる。

- ・子どもを観るということについて、色々なサイドから観ることで例に出された（「ももたろう」：一般的にももたろうは、鬼を退治した英雄。しかし、鬼の子どもから見てももたろうは親の敵・・・）。このことによって、色々な立場で物事を観ることを学んだ。

- ・いつもを知らないといつもと違うところがわからない。このことは、危機管理につながることを学ぶ。

- ・子どものホッとする環境も大切であるが保育士もホッとする環境が大切。保育士とは、子どもを楽しく過ごさせる専門家である。（基本は保育士のワーク・ライフ・バランス）

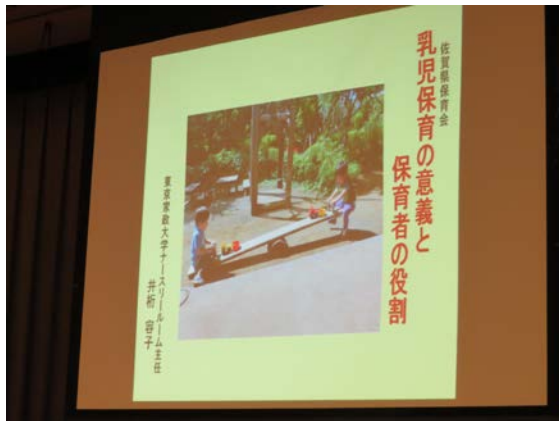


保育者の心得

- ・保育は時間の流れの中にあるので見落としがたくさんある。謙虚さを持ち子どもの

行為を細かくでなく深く観、保育者自身が、この時この子はどんなふうかな？と悩み振り返りを行う。

- ・保育や教育には○・×はつけられない。
- ・子どもには、表現の保障をする。トラブル時には、自分の思いを素直に言葉で表わせるよう保育士は、双方の思いを言語化することが大切である。
(情報の知識化へとつながる)
- ・子どもが大人に困っている時代。何がそうなったのか？
大人のストレスが子どもに伝わっている。「人と同じでなくていい！！」ということを守護者に専門知識を織り込み、きちんと伝える。保護者の納得・安心が子どもに伝わる。



(効果及び評価)

◎今回の研修会では子どもをよく観るところから始まりプロとしての意識の持ち方、乳児保育の歴史・今の親の現実・脳のつくりなどいろいろなことを総合的にわかりやすく学べたと思う。また、経験年数を重ねることは、思い込みが激しくなる。このことは、先輩保育士が常に頭の中に入れておくことが、重大なポイントにつながるのではないかと感じた。(自由な思考発想・見落とし等) 子どもの観方においては常に振り返りをしながら深く子どもを見ることを学ぶ。また、自分の園の子どもに対する観方や接し方等を振り返りながらそのことについて保育者自身がいろいろ考えさせられているのではないかと言う空気が、研修会場内に流れていたように思う。

(文書：光の園保育園 森 幸子)